

詩時評

第23回

詩人の労働とは

松本衆司

颯木あやこ詩集の葉から「中世の錬金術師たちが言葉をあたかも葉草のように用いたように、この世界のなかに言葉を摘みに行く。詩人が言葉を作るのではない。(略)エビグラフに置かれたサンIIテグジュペリの『人間の土地』にある一節は、この詩集を貫くそうした営みの確かな象徴になっている。／／ほくらを、豊富にしてくれる未知の条件があるということ以外、何が、ほくらにわかっているだろう？／／詩人はいつも未知なる言葉を用いる。言葉はいつも詩人の思いを超えて働く。詩人が言葉を選ぶのではない。言葉が詩人を呼ぶのである。詩人の労働とは、沈黙を作り出し、言葉からの無音の呼びかけに耳をひらくことにはかならない。」(若松英輔「時の涙と魂の自転車」より)

颯木あやこ詩集『名づけ得ぬ馬』(思潮社)を読む。「ある問答」を引く。

——どんな傷が刻まれた？／／背中にも、羽が根こそぎもがれたあとには／黒い三日月／／瞳に、／愛する者が焼かれる炎をみつめたあとには／太陽の黒点／／——傷から何色の血が流れた？／／空の喉から絞った青／レクイエム ただよわせ／／ブロンズの雫／破裂音 放ち／／——何が赦された？／／何も。／墮ちたいのちすべて 草原の草になって揺れている／／叫び。／あらゆる悲しみの破れ目から洩れるひかり／／——そして傷から 何が生えた？／／白樺。空の裾かざりには届く／／視界をしずかに閉じてゆく薦

暗喩の独創性に導かれ詩集を読みすすめた。いかにあれば、生きることの哀しみをこまめに詩に昇華させることができるのか。詩人のセンスに驚く。また、若松英輔の葉文「時の涙と魂の自転車」は白眉であった。右にも引いたが、その冒頭部分「詩人の役割は、痛みを表現することではない。それを変容させること、痛みを折り、そしてついに愛へと変貌させることである」これも尊い言葉だ。

林嗣夫代表詩選『ひぐらし』(土曜美術社出版販売)を読む。二十冊の詩集・詩選集から自選した詩篇が二九九頁に収められている。一九八八年刊行の詩集『U子、小さな迂回』抄から「恋唄 あるいは後記」を引く。

恋唄を書きたい／／と思うのだが／／押さえてころのない／／このくにのことばの中に／／一つのかたちをつくり出すのは／／至難のわざ／／距離をとろうとして／／「知」のくさびを打ち込む／／何回も裏返る／／いつのまにか／／おどけた調子の／／あとずさりになっていた／／無化することが／／そのまま／／合一することでありたい／／きみと／／恋唄を書きたい／／自由に／／テーマなき時代／／表層のリアリティ／／制度のわなを越えて……／／しかし／／テーマのないところに／／自由なんてあるはずもないし／／もはや青々とした田んぼの風景も／／夢にも見なくなつた／／てのひらの上で／／ビールを飲み(飲みはつまらない)／／ピフテキをかじり(ピフテキでは詩にならない)／／さびしくなる／／なまめくもなのてのひらの上を／／かなたまで疾走して／／小指の一本切り落としてやりたいが／／ひとり／／たわむれの姿勢をとりつづける／／／でも／／やっぱり恋唄を書きたい／／書きたい／／お互い他人同士が／／一字一句を奪い合うようにして作り上げる／／刻々の共同声明／

そんな自由を現出させたい／きみのことを
「きみ」と／苦くも／書きつけたい

林嗣夫という詩人の真骨頂を見るような感
慨にしみじみ浸る。いのちを生きたとは、か
ような夢や希望のことではないか、と思いな
がら。そして、もう一篇、二〇一九年刊行の
詩集『洗面器』から「柿」を引ききたい。

庭のかたすみに／熟した渋柿が落ち／つお
れて緋色の果肉をさらしていた／激しいで
きごとの後の／しずけさで／頭上の枝枝
には／まだ熟しきらないいくつもの柿が／
心配そうに下を見おろしている／大丈夫
あなたたちの落下を支えるために／大地は
いつも／手を広げて待っているんだよ／そ
んな詩人の声も聞こえてくる／／ところが
／つぶれた柿へ一歩近づいた時／黒い美し
い蝶が／ひらひらひらと飛び立った／柿の
そばに身をひそめていたのだ／／そうか／
そのような月日が流れてきたのか／柿はこ
の蝶に会うために／初夏の若葉／花／そし
て実をつけ／重さを養い／渋を甘みに変え
／ついに落下して／思いの傷口そのものにな
ったのである／／蝶も／この日を待って
訪ねてきた

五十年の詩業、そのいのちの営みの尊さを

描きさるる林嗣夫という詩人に敬服する。

川上明日夫詩集『空耳のうしろ』（山吹文
庫）を読む。「雲、ひたすらに」を引く。

泣きはらしては流れて行く／この場所は／
さみしい勾配でしたよ／花を凍えては／ゆ
るやかにほぐれ 斜めに／晒されては／吹
かれている風の／どちらから どちらへ
の／そんな 階／気まぐれな わかれ途
とおくで 花を読んでいる／人もいて 声
のしじまの／木霊にはなれたのでしよう／
この場所は／見えないゆくさきへ と／な
がめる改札／おもしろいの裏通りにも／秋
は／もう ひっそり実っていて／忍草が
さそう／こころの 影 日向／掴みようが
ありませんでしたよ しぼし／土手にむら
がった彼岸花のえにし と／たなごころを
ながめては／ひたぶるに／燃えているよう
でしたね／人は／かつて在ったという場所
が／夕日のように染まるそこへ／いつか／
還ってゆくようです／河原鳴が／とほくで
鳴いていましたよ／越美北線 美山 計
石駅／墓終いの日／ほら 木守柿のし
たあたり／糞、手をふってます

川上明日夫という詩人の精神の瀬戸際を見
るような読後感であった。これほどに言葉の

なかに潜む寂しさを掬い取ることができると
のなのか。死と接する生きる風景が実はわた
したちの現実なのだ、と思いきらされる。

長嶺幸子詩集『Aサインバー』（詩遊社）
を読む。「小さな窓」を引く。

窓辺に／光が射し込み、風が訪れる／ここ
から見わたせる／いくつもの景色たち／
小さな窓から見える景色がある／卓袱台を
囲んで談笑する／父、母、きょうだいたち
／小鳥の私が歌っている／小さな窓から見
える景色／川辺の岩に凭れ／際限なく友と
語る少女／孤独も虚しさも、いまだ知らず
／彼方の水平線で夕日が笑っている／小
さな窓辺／あるとき娘は／あなたの腕のな
かできめき／女になった／／そして夢みた
／真夏の夜／彼方から／珊瑚の海へや
つて来るスクの群れ／私は人魚になって歌
う／／私たちは／小さな家を建てた／窓か
ら光が差し／風はさやさと戯れる／その
窓辺で／あなたにしがみつき、永遠を見つ
めた／小さな営みを大事そうに／抱え込ん
で／／あれから空も光も風も夕日も星も／
不変のままそこにある／どうやら、この窓
辺で／私は老いてゆくようだ

暮らしの中で、「窓辺」に佇むひと時は大

切にしたい独りの時間だ。そして、誰も心の中心に「窓辺」がある。長嶺さんはその「窓」の向こうに「母」の生きていた時代の沖繩、家族の風景を見る。そして、それを抒情豊かに、まるで愛の語り部のように描く。

樋口武二詩集『水の声』（詩的現代叢書）を読む。「エピソード 夢のようなものの中に居た」の第一連を引く。

不安がつくりだす荒野に、私は、立ち戻るように呼んでいたから、もう、枯れた声で応えるしか術がなかった。そして、貴方は誰、と、か細い声で泣くしかないのだ。不確かな言葉と、おぼろな気配のようなもの、に誘われて、寄る辺なき影たちが、うらうらと私の朝を埋め尽くしていく。いったい私は、何処に置かれていたのだろうか。全てが虚であり、現でもあるのだろうか。力なく腕を垂らせば、私の手を握ろうとしている手があった。私という存在は、いずこへ誘われていくのか。幽かに妖しく揺れるものを、何と呼べばいいのか。先も見えぬ薄闇に、言葉だけが萎れていく。顔にあたる風は少し甘く感じられた。問いは生まれるだけで、それすらも、やがては失せていく代物でもある。もう、何も見えないのだ。

青い影たちは、ゆつくりと歩みだして、やがては今日という日が、私を、しずかに日常へと連れ戻していくだけのことだ。握られた手は、かすかに引かれているのだが、それすらも幻のようなものに思われてならないのだ。あらゆるものは、水のなかの景色のようなものであり、いまとなつては、懐かしいだけのこともある。名付けようもない不安と起居するだけの辛い日々が、私に垣間見せる朝の浅い夢、と云ってしまえば、それで終わりのもので、

不条理という言葉が浮かんだ。古い、認知症、ケア・ホーム：という言葉が矢継ぎ早に続く。真実として、生きることがかような夢現であるのかもしれない。これこそ抗えない人間の生の描写とは言えないか。

橋爪さち子詩集『糸むすび』（土曜美術社出版販売）を読む。「謎かけ」を引く。

しゅうとめは亡くなる間際／右手を少し上げ／何かに掴まるように／拳を握ろうとした指のまま／逝った／／あれは何だったのだろう／／身体を／彼岸に持つていかれる浮遊感に／思わず抗した動作だったのか／／夫と繰り返す話した／判らないね／いつとも結論は出なかった／／それから幾十年も

の月日が過ぎ／右手の謎については／話すことも無くなっていた／／何だったんだろ／うね。あの指は／暑苦しい八月の夜／たがいの寝室へ右と左に別れながら／夫がしみじみ眩いた／気がつけばふたりとも／いつ亡くなってもいい歳になって／／ベッド脇のラジオを小声につける／落語が牛の涎ふうとうつうつ響く／それにしても／しゅうとめの没年に近づいた今／あの右手は単なる浮遊感ではなく／息子である夫への／最期のいとおしみだったようにも／自身が生きた日々への愛惜だったようにも／名づきたい寂寥感だったようにも／さまざまに思える／しゅうとめの謎かけは。いずれ／夫と私。別べつの日に／たがいに教えあう術もなく／身をもって解くことになるだろう／／今夜みる夢の淵に／夏つばきの白い花卉が次つぎにほだけて／いくようだとしても嬉しいですが

詩集の読後感としては妙な言い方になってしまいが、人生いかにあるべきかという、その上質な思索の、その馥郁とした香に誘われ満たされた気分である。いずれの詩も見事な完成度で、その作品世界に引き込まれた。

宇佐美孝二著『黒部節子という詩人』（洪水企画）を読む。昭和七年生まれ、平成十六

年に七十二歳で没した詩人黒部節子の足跡を辿る宇佐美孝二の労作である。四十歳で脳内出血で倒れ、闘病生活を送られ、五十三歳で再び脳内出血、以後意識の回復なく逝かれたその人生と才能を惜しむ鎮魂の一冊である。二十五歳の彼女の最初の詩集『白い土地』に収められた「物語」全文を転載する。

白い空の消えるあたり／早い晚餐がひらかれた、つつましい／虹色の椅子やテーブルの上で／空腹の天使は空ちゅうに／つめたい海盤車をこぼしていった／海が光り出す前に／／陸地のつぎるあたり／一面の草原の乾いた風の中を／短い葬列が過ぎていった／遠い海へ棺がはこばれた／／太った父親と喪服をきた乳母のまえを／恋人だった少年は勇敢に草を開いていった／すぎさるあとから　ひかす険のやうに／高い草はふたたび閉ざした／死んだ小さな娘は涙をこぼしてゐた／天使たちは冷淡だった／雲と風にふくらんだ髪を梳き／早い食事のあとかたづけが／彼女の日課だった、固い皿やコップの内側には／いやらしい天使たちの歯型がついていた／海の光り出したころ／海に細い墓標が立った／乳母はコスモスの花を投げた／少年はアマリスの球根を投げた／／少年はちいさな悔恨をなげすてた／燃える書物をなげすてた／燃える夢、多

くのまづしい計画を／海が陸地を犯しはじめるときだった

青春の精一杯の詩精神がこの初期の詩篇には満ちている。ここがきつと黒部節子の純粹な汚れなき想像力の原点であろう。

寺田操個人誌『Poetry EDGING』四九号を

読む。A4の紙を三つ折にし裏表六面を二枚、タイトル面に写真を施し、詩や文が綴られた個人誌である。「シロツメクサの夢」を引く。

シロツメクサを摘んで帰り青いカットグラスに挿してスケッチした。小学校の坂道への側溝近くで見つけたシロツメクサは茎が短く草穂の陰にほんぼりのように小さな白い花びらを寄せ合っていた。数日の明け方、シロツメクサにまつわる夢を見た。／民家のイングリッシュガーデンのアーチを友達とふたりでくぐり、小さなアトリウムに足を踏みいれると、雑貨、鉢植え、クッキィ、などが並び、ワークショップも開かれている。買い物をしたが品物がわからない。支払いをすませると買った品物以上のギフトが紙袋に入っていた。この先の美術館にはよく来るので、また立ち寄らせていただきますとと言うと、一日限定のガーデンなので、ゆつくりと遊んで行ってくださいと、

エプロンかけた中年男性が笑顔で言った。ワークショップのひとつに、無地のエプロンの腰あたりには二本のミシン目がついている。糸をぐいと引つ張るとエプロンドレスになりますと説明されたが、糸を切つてほどこきミシンの縫い目にそって横一列にシロツメクサを描いてみた。下部の広い空間にはテーブルとイスとベンチ替わりの枕木を描く。透明人間のための場所だ。ヒト科の目から隠されていても、彼らは存在している。読書をしたり、青空を眺めたり、流れゆく雲に番号をつけている。左下から右上へと曲がりくねった坂道をつくり、シロツメクサの花を咲かせてみよう。宮沢賢治の小説では、ツメクサの花の灯りを目当てに歩いていけばポラーノ広場にたどりつける。ところで一緒に来た友達姿が見当たりません。／長く濃い夢でした。『ポラーノ広場』を開いてみると、ツメクサの花と月の明かりのなかに美しい娘が立っていました。少女に戻った女友達はここにいました。

メルヘンの装いで綴られた作品に引き込まれる。私たちの生きるこの現実がひとときの夢であることを優しく語りかけるお伽話のような見事な一篇である。詩歴豊かな寺田操の奥行きを感じさせられた。